

# 作物を 育てる、 人が育つ!

～タキイ園芸専門学校卒業生を訪ねて、  
元校長が見た次代を担う若者たち～

## 家族単位によるプロッコリー 第2回 大規模経営

長崎県 雲仙市吾妻町 吹原大介さん

(57回専攻科、平成16年3月卒業)

タキイ園芸専門学校 元・校長  
福嶋 雅明



↑大介君とご両親。平成28年1月から吹原家の経営は大介君が引っ張ることになる。

### 吹原大介君との出会い

今回訪ねた卒業生は、長崎の雲仙市でプロッコリー栽培を営む吹原大介君です。大介君が入学したきっかけは、平成12年に種苗店の紹介でハクサイ品種を見にご両親がタキイ研究農場を訪問されたことがきっかけでした。圃場で実習する生徒の中に同郷でご近所の先輩谷崎直人さん(53回生)が在学中であったことを思い出し、ご両親は生徒たちの様子を見ておられたそうです。生憎谷崎さんとは圃場で会えなかったものの、生徒たちが実習に打ち込む真剣な姿に感心されたそうです。ここから高校卒業後の大介さんをお呼びしても大丈夫と確信いただいたそうです。そうした縁と周囲からのすすめもあり、2年後に本校進学が決まりました。彼は、私の校長就任最初の専攻科生とあって、特に印象深い生徒の一人です。

### 農業経営履歴書

彼の父、繁男さんは昭和42年16歳で就農し、麦・馬鈴薯・水稻栽培からスタートされました。ところが昭和47年、21歳の時に繁男さんのお父さんが急逝。この年はレタスが急騰した年で、「これからは野菜作りの時代になる」と亡くなる直前に伝えられたそうです。そこで、葉菜類主力の経営へ転換、新規野菜として当時は珍しいプロッコリーを新規導入されました。当時、農業の教材にしたタキイ発行の「園芸新知識野菜号」で紹介されていたプロッコリーに興味を持たれたからだそうです。



↑就農当初、大介君は、目前の作業をこなす学校とは違って、1週間先の天候と生育状態を読んだうえで対応していくことに戸惑いを感じたと話す。

小学校からタキイ園芸専門学校卒業までの14年間、無欠席を続けたことです。お母さんも「本当に自慢できるとだね」と目を細めて話されました。畑仕事で日中家を空けることが多い家族に迷惑をかけないよう強い意志で頑張ってきたのだと、ちあきさんの感謝が伝わる言葉です。彼の背筋の伸びた姿勢と、寡黙で愚痴を言わずに実習をこなす姿を思い出しますが、そうした幼少期から剣道で鍛えた心構えもあったのだと、ご両親の話聞いて合点がきました。

彼は平成15年に1年間の本科を卒業後、プロッコリー栽培技術の習得のため葉菜の専攻科へ進学、平成16年卒業後直ちに両親の許で就農となりました。

その後、高度経済成長により食の洋風化が急速に進みました。中でも調理が簡単なプロッコリーは、急速な消費拡大が見込まれ、販売価格がキャベツ・ハクサイに比較しても極めて安定していることに注目。平成14年に地域でさががけてプロッコリー専作へと経営を特化されました。

昭和57年には、市場から規模拡大の要請もあつて、親族2家族による吾妻洋菜研究会を立ち上げ(後に妻側親族が加わり3家族)、いち早く予冷倉庫を設置。平成5年には規模拡大をにらみ県内初の全自動播種機・セル育苗・半



↑大介君は、入学当初のひよろりとした印象は影を消して、ぐっと身体がひきまわっていた。圃場で父親と一緒に収穫を競い合う姿に逞しさを感じた。



↑父と元校長というそれぞれ異なる立場ながら、大介君の成長を認めている。

自動移植機を導入。平成10年には出荷方法を横詰め方式に切り替え、作業の大幅な効率化を図りました。平成15年には後継者を見据え、育苗ハウス・倉庫・大型冷蔵庫をさらに新設し作付面積を5・5haから7・5haに拡大。平成17年は8・3haとなり、この年、長崎県農業経営体部門にて知事賞受賞。平成18年には先駆的な経営改善と長年の地道な努力に対し毎日新聞全国農業コンクールにて農林水産大臣賞受賞、農林水産祭園芸部門にて天皇杯受賞。平成25年には黄綬褒章受章と、ご夫婦で輝かしい実績を残してこられました。

現在の作付けは11・5haとなり、出荷先の長崎、岡山、大阪各市場からも大きな「信頼」を勝ち取ることに成功しました。

**大介君を見守る目**

平成28年1月から、繁男さんが65歳を迎えるのを機に、大介君へ経営委譲されました。経営委譲のことは10年前から伝えてこられたそうで、彼も徐々に心構えはできていたようです。給料を貰う立場からご両親へ支払う立場へと変わること、今まで以上にその責任は重大です。

彼が経営を引き継ぐには、大きな課題が二つあります。一番大切なことはご両親が長年かけて築きあげた市場の「信頼」を崩さないことです。市場のぞむ高品質のプロットコリーを周年安定供給できる体制を維持することです。

二つ目は、延べ面積11ha、作業員3人の家族経営は、直接市場取引するには最小限の規模です。さらなる作付け拡大には、雇用による周年雇用体制の確立が必須となります。また、6〜9月のプロットコリー端境期を如何に縮めるか。気温に敏感で暑さに弱いプロットコリーは、梅雨も重なるこの時期に栽培可能な品種を今のところ見いだせていません。雇用を確保するには端境期に収入を得られる新規作物導入も検討する必要があります。

ねられた繁男さんらしい厳しい指摘です。この日、圃場で二人の収穫作業を見せていただいたのですが、指摘はすぐにわかりました。繁男さんの収穫作業の手際よさは格段に無駄がなく、その差は一目瞭然でした。父親の技術が高ければ高いほどこれを超えることの困難さを眼前にし、多くの卒業生が親元でぶち当たる最初の壁がこれだと、痛切に感じられた光景でした。

「まけるな大介、頑張れ大介！」

### 取材を終えて

専門学校での2年間は、彼にとつても今を支える大切な時間となったようです。彼は一生の親友や仲間が全国にできたことは何より財産だといえます。また就学中、月々研究費が支給されますが、在学中はもとより卒業後もそれに手をつけず、そのまま大事に残しているそうです。「大切な思い出、宝なので使う気がしません！」と言う彼の言葉を聞いて大いに感激しました。

現在彼は、「同年代の勤め人以上に収入を得るだけの仕事はしていると思います」との自信をのぞかせます。しかし、繁男さんの目から見ると教科書通り過ぎると注文が付きます。農家として時には手を抜くところは抜いて、効率を上げることも大切だと。経験を重

「就農から3年で農業がどういうものか分かりました。10年でよさがわかりだして、ようやく楽しくなりました」と、自信を持って話してくれた彼の成長を肌で感じた訪問でした。将来の日本農業を担う人材がここにもいます。

(平成28年1月21日)